

事業2 研究・臨床実習期間中の海外渡航支援

番号	氏名	渡航先	国・地域	渡航先での受入期間
1	K・K	国立台湾大学	台湾	2024/4/1～2024/4/26

令和6年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科	6年	学籍番号：*****	氏名：K・K
--------	----	------------	--------

渡航先国：台湾
受入機関名：National Taiwan University Hospital
渡航先機関での受入期間： 令和 6年 4月 1日 ～ 令和 6年 4月 26日（ 26日間）

今回、大阪大学の岸本国際交流奨学金の支援を受け、国立台湾大学病院での海外実習を行った。貴重な経験を積む事ができたので関係者の方々に感謝を表し、今回の実習での経験を報告したい。

【実習目的】

今回の実習の目的は大きく二つある。異文化での医療のあり方の学習と医学英語を含んだ医学的知識の習得である。台湾は日本統治時代の影響が色濃く残る国であり、また独自の文化も混ざることによって固有の文化が育っている。この台湾という地で実習を行うことで、日本の医療との違いを見出し、豊かな視野を得ることにつながると考える。さらには台湾の医学生と交流をする中で、医師やコメディカル、医学生のあり方についても学部と同時に、医学的知識の向上を目指したいと考えている。

【実習のスケジュール】

小児科2週間→家庭医学科2週間

以下に簡単なスケジュールを示す。

第1週	4/1	4/2	4/3	4/4	4/5
小児科 PICU	カンファ 回診	講義 外来見学	カンファ 回診	祝日	祝日
第2週	4/8	4/9	4/10	4/11	4/12
小児科 General Pediatrics	カンファ 回診	講義 外来見学	カンファ IC 回診	講義 回診	カンファ 回診
第3週	4/15	4/16	4/17	4/18	4/19
家庭医学科	カンファ	カンファ	カンファ	カンファ	カンファ

Geriatric Medicine	肥満外来見学	teenager 外来見学	travel medicine 外来見学	Women health 外来見学	禁煙外来見学
第 4 週	4/22	4/23	4/24	4/25	4/26
家庭医学科 Hospice & Palliative Care	カンファ 回診	カンファ Advanced Care Planning 外来見学	カンファ 回診	カンファ 回診	カンファ 回診

【活動内容の詳細と成果】

国立台湾大学の小児科は規模が大きく、小児科と産婦人科専用の病棟が存在する。実習の初日に自身の希望に応じて小児科のどの専門領域の実習を行うかを相談する事ができる。私は1週目を PICU、2週目を **general pediatrics** で実習を行った。どの専門領域かに関わらず、毎朝8時からカンファレンスもしくは学生向け講義があり、特に麻疹に関する講義やワクチンに関する講義は非常にためになった。PICU では川崎病、d-TGA、喘息の急性増悪、敗血症性ショックなど重症な症例ばかりで、術後エコーや VV-ECMO の説明、現地の学生と一緒に回診などを行った。**General pediatrics** では喘息や皮膚筋炎といった呼吸器免疫系疾患の患者や急性虫垂炎、肺炎など幅広い疾患の患者がいた。台湾、特に NTUH では患者の数が非常に多く、外来で一人に割ける時間が長くないのが特徴であり、そのため入院患者の回診ではより時間をかけ、喘息の治療薬の使用方法を丁寧に患者家族に指導している姿が印象的であった。吸入薬にもいくつか種類があり、その吸入方法にもいくつかステップがあるため、往々にして喘息薬のコンプライアンスは悪くなってしまうのが現実で、そのコンプライアンスを上げる事が治療において非常に重要であることを実感した。外来で見学では担当医師の指導のもと、咽頭観察や耳鏡による鼓膜観察、聴診器による呼吸音と心音の聴取などをさせてもらった。

家庭医学科では1週目を老年医学科、2週目を緩和ケア科で実習を行った。回診では教授の患者とその家族に対する話し方、接し方を学んだ。それぞれの患者の回診が終わる都度、先生が何に意識をして、そしてどのように対話をするべきかを説明してくださり、ターミナルケアのあり方を学ぶ事ができた。中でも印象的だったのが「質問をするのに関心を持つのは違う」、「結果を見て、その結果に至るまでにどのような過程があったかを考える」というお言葉だ。治療計画やケア計画のために必要な情報、例えば症状の有無などを質問すること自体は必要なことではあるが、それだけでは十分ではない。医療従事者が患者とその家族に「関心」を持つことで、質問の仕方も自然と変化し、質問の受け取られ方も変わる。そうすることで患者とその家族も心を開いてくれ、より深くその人たちのこと

を知れることにつながるのだ。

また、ある癌の終末期の患者の奥さんが、次に患者が発熱をしたら抗菌薬投与を行なって欲しくないという決断をした。私たち医療従事者はこの結果だけを見るのではなく、この決断に至った過程にこそ目を向けるべきである。抗菌薬を投与すれば治療は可能であるかもしれないが、それを行うかどうかは患者とその家族の意思によるので、投与するかしないかという結果は重要ではない。その結果に至るまでには様々な葛藤や悩みがあり、その点を理解した上でその後のケアプランを考えていくことこそが医師の仕事である、ということを学んだ。

毎朝のカンファレンスでは他科とは毛色が異なり、医師、看護師、心理士、理学療法士、作業療法士などが集い、一人の患者に対する評価を丁寧にお互いに共有しているのが印象的であった。回診でも様々な職種の方が同行しており、一つの医療チームとしてどのように動くべきであるか、という一つの模範を示してもらうことができた。

【感想】

台湾では日本の文化が色濃く残っており、家庭医学科の外来見学中に私が日本から来た留学生であることが分かったと、日本語で話しをしてくれた患者がいたことが印象的であった。医療保険制度や病院のシステムなど日本のものと似ている点が多く見られる一方で、異なるところも多く、現地の学生と熱く議論を交わしたことは非常に思い出に残っている。日本と同様に皆保険制度であるが、全ての治療が保険でカバーされているわけではなく、基本的な治療以上のもの、例えばより良い後発薬を使いたい、より新しい機械を使いたいといった場合には自費診療になる。基本的にはどんな疾患であっても、保険がカバーしている範囲だけで治療を進めることができるのだが、こうすることで医療費の削減が可能になっていた。医療費の増大が問題としてある日本も、一部参考にできるところはあると感じた。また、現地の学生は医学を英語で学ばなければならず、カルテも基本的にはすべて英語であった。しかし、患者との対話では中国語を使うため、このギャップが煩わしいと感じる人も多いようだった。日本では母語で医学を学習でき、医学生にとっては非常にありがたいことではあるが、卒後、世界規模で活動していく上では不利な点でもあるなと実感した。

小児科であっても、家庭医学科であっても外来に訪れる患者数は多く、半日で30人ほどは診ていた。特に家庭医学科では中には通院年数が20年を超える方もいて、ドクターと家族の病気の相談をしたり、雑談をしたりなどと文字通り「家庭」医学を実践されていた。外来診療において大きく日本と異なる点はそう多くはなかったが、患者との距離の近さは日本の大学病院にはないものである。外来についてくる事が出来なかった家族と電話をつないで、患者の家での様子を聞いたり、聞き忘れたことがあったので診察室に戻って

きたりなど、医師に相談することへのハードルが低いことが特徴であると思う。

実習開始後三日目に花蓮（台湾東部）で地震が発生し、NTUHのある台北でも揺れを観測した。幸いにも台北では大きな被害はなく実習を継続することができたことは良かった。被災された方、地域の一刻も早いご復興をお祈りしております。

【今後の抱負】

今回の留学経験を通じて、医師として大事な考え方をいくつか得ることができた。また現地の医師、学生との交流を通じて台湾の医療、文化を理解することができ、今後も続いていく国際的な交友関係が築けたことは、私の今後の人生においてかけがえのない財産になったことを確信している。普段とは異なる環境での実習は非常に刺激的であり、この経験を糧に今後素晴らしい医師になれるよう、今後より一層励んでいく所存である。

最後になりましたが、今回の海外実習にあたり準備をしてくださった先生方、温かく迎え入れてくれた国立台湾大学の先生方、そしてご支援を賜った岸本先生に、この場をお借りして御礼申し上げます。